

市史だより

Gačiがちまやあ

第7号・2005年11月30日(水)発行
年4回 (5・8・11・2月発行)

編集・宜野湾市教育委員会文化課 市史編集係
〒901-2710 宜野湾市野嵩1-1-2

問い合わせ・情報提供先

☎ * (* ☎ * ☎

☎ (098) 893-4431

Fax (098) 893-4434

Kyoiku08@ami.city.ginowan.okinawa.jp

☆サンタがやってきた☆



1950年代から60年代にかけて、「琉米親善」と呼ばれた米軍と地元の人々との親善活動が盛んに行われていました。宜野湾でも、それは例外ではなく、米琉対抗のスポーツ競技会や、子どもたちを基地内に招いたパーティーの開催、クリスマスプレゼントの贈呈なども行われていました。小学生を対象としたクリスマスパーティーは毎年のように行われていましたが、宜野湾では1969(昭和44)年、学校からの要請によって、このクリスマスのつどいが中止になりました。招待される子どもの数が200人に限られていたことから、行ける子どもと行けない子どもの間で不公平感が生まれるといったことが、その大きな理由でした。未来をになう子どもたちへの一番のプレゼントは、差別や争いの無い平和な世界。サンタさんが届けてくれることを、みんなで祈りたいですね。

赤ちゃんコンクール！？

みなさんは、「赤ちゃんコンクール」という大会を知っていますか？

このコーナーでは、「赤ちゃんコンクール」について紹介していきたいと思います♪♪

☆赤ちゃんコンクールのルーツ、健康優良児審査会？！

今から54年前になる1951（昭和26）年5月5日の「こどもの日」に、第1回目となる健康優良児の表彰式（琉球新報社主催）が行われました。これは、「強い子、よい子、賢い子」に育てようとの目的によって開催されたものです。表彰式にあたり、全島の小学6年生の男女児童を対象に審査を行い、沖縄一の健康優良児を決定しました（→この審査会が数年後、「赤ちゃんコンクール」へと変化していくのです）。児童生徒には、健康診断（身長・体重・胸囲・座高など）、体力状況（50m 疾走・スポンジボール投げ・出欠状況・活力・耐久力など）、精神的状況（性格・健康に対する努力）、学業成績など厳正なる審査が行われたそうです。審査の流れは、①各小学校の校長先生によって男女各1名を選出し、琉球新報社から配布される推薦用紙に記入後、地区教育会事務所に提出します。→②地方審査会によって、地区教育委員会で書類審査を行い、地区代表の男女2名を選出します。→③中央審議会（健康優良児審査会のこと）によって、地区代表の児童へ書類審査・面接審査を行い、沖縄一位（男女各1名）、準沖縄一（男女各1名）、特選児（男女各3名）の健康優良児（計10名）を決定します。→④その後、沖縄一位、準沖縄一、特選児の児童10名をこどもの日に表彰しました。なお、第1回大会には154校から300名の児童がエントリーしたそうです。

☆赤ちゃんコンクール開催！！

こうした、児童生徒を対象にした健康優良児審査会は、1951（昭和26）年の第1回大会から1953（昭和28）年の第3回大会まで実施されました。その後、1955（昭和30）年の第4回大会から「赤ちゃんコンクール」へと名称が変化し、正しい育児知識の普及と健全な赤ちゃんの育成を目指して、コンクールは開催されるようになりました。コンクールでは、2歳未満の赤ちゃんを対象に審査がなされ、赤ちゃん沖縄一を決定したのです。

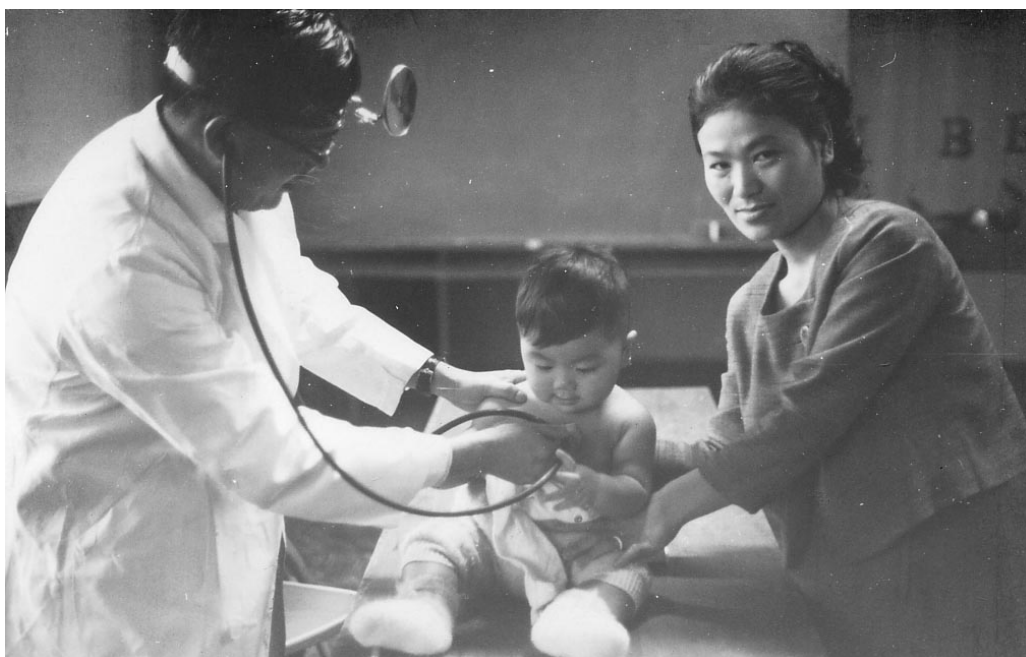
☆宜野湾市での赤ちゃんコンクール審査会の様子♪

もちろん、宜野湾市でも赤ちゃんコンクールは開催され、多くの赤ちゃんが参加したようです。1963（昭和38）年の『市報宜野湾42号』にも赤ちゃんコンクールの一次審査開催の記事が掲載され、審査の様子を知ることが出来ます。市内の各校区毎での審査を通過した赤ちゃんは最終審査に臨み、出産時と現在の身長・体重・胸囲・頭囲の測定などの審査が行われました。



赤ちゃんコンクールの審査風景：1964（昭和39）年

審査といっても、緊張した様子は見られず、元気に育った赤ちゃんの成長を喜ぶお母さん達には笑顔があふれ、泣きじゃくる赤ちゃんも見られ、賑やかな様子だったようです。審査によって選抜された本市代表の赤ちゃん（男女2名）は、地区大会への出場権を手にしたのです。



赤ちゃんコンクールの審査風景:1965(昭和40)年

☆赤ちゃん沖縄一までの道のり！！

このように、①一次審査によって各市町村の代表者を選抜します。→②二次審査によって各市町村の代表男女2名、約90名の赤ちゃんから地区代表を選抜します。→③そして、いよいよ、最終審査となる全琉赤ちゃんコンクールで地区代表の中から赤ちゃん沖縄一を決定するのです。その際にも、身体測定、病気の有無、発育状況、栄養状況、均整がとれているのかなど、厳正なる審査が行われたそうです。→④その後、こどもの日に審査を通過した市町村優良児（男女各45名）、地区代表優良児（男女各18名）、ベストテン（男女各5名）、沖縄一（男女各1名）の計138名の赤ちゃんを表彰し、記念メダルが与えられたそうです。

☆赤ちゃんコンクールのその後♪

1955（昭和30）年の第4回大会から始まった赤ちゃんコンクールは、1970（昭和45）年の第20回大会まで開催されたようです。それ以降に大会が開催されていたのかについては、残念ながら調べることは出来ませんでした。しかし、宜野湾市ではその後も、市連合婦人会主催の赤ちゃんコンクールが1975（昭和50）年に開催されていました。各区から推選された赤ちゃん30名余りの中から、入選した6名の赤ちゃん（女児2名、男児4名）に表彰状と記念品が贈呈されたそうです。

その頃に、参加した赤ちゃんも今では50歳代となりました。もしかしたら、お父さん、お母さんも出場していたかも？ひょっとしたら私も出場者かも？と心当たりのある方もいらっしゃることでしょう。コンクール出場者があなたの身近にいるのかもしれないですね。この機会に、ご家族の方に尋ねてみてはいかがでしょうか。楽しい家族団らんの場で、話題の一つとして取り上げてもらいたいものです♪

カー！^{そのいち} 其ノ一

お正月には、^{ワカミジ}若水汲みに行きませんカー！

■カー、あれこれ

沖縄県内には、“カー”と呼ばれる湧き水が各地で見られます。宜野湾市内では、およそ120カ所のカーが確認されています。宜野湾市は、比較的、水の通しやすい石灰岩を台地としており、地下には水や洞窟が多い場所です。水は高いところから低いところに流れるので、宜野湾市では、標高の低い西側に水量抱負なカーが見られます。特に大山のタイモ畑では、多くのカーが見られ、タイモや生きもの達にも潤いを与えています。



ヒージャーガー（大山）

■生活の中のカー ～お正月は若水～

カーの水は、上水道が普及する前は、飲み水や野菜洗い、洗濯用水、牛馬の水浴び場として利用するだけでなく、人びととの情報交換の場でもありました。また、子ども達にとっても夏場の格好のプールだったのです。このように日常生活の利用だけでなく、特別な場面でも利用されていました。集落で赤ちゃんが生まれると、数カ所あるカーの中でも「ウブガー（産泉）」と呼ばれるカーの水を汲み、その水を赤ちゃんの額につけて、健康を祈るウブミジ（産水）の習慣がありました。また、新年を迎えると、子ども達がカーの水を汲んで、親がその水でお茶を沸かして火又神や仏前に供え、新年を迎えての家内の健康を祈りました。これを若水（ワカミジ）といいます。子どものいない家庭では、近所の子ども達に水汲みを頼み、そのお礼としてお駄賃（お年玉）をあげることもあったようです。



森の川（真志喜）



クンカー（宇地泊）

～思いがけない旧正月～

○台風と農作物

前号では、戦後初期の沖縄に上陸した台風と、「1マイル制限」について紹介しました。この時期の沖縄に上陸した台風はどれも勢力が大きく、多くの民家や農作物に大きな被害を受けました。

当時の宜野湾村では、土地の開放がなかなか進まず、村民は野嵩や普天間に密集して生活していました。例えば土地が開放され、居住が許可されても、それらの土地は戦災によって荒れていたもので、とても生活できる状態ではありませんでした。そのため村役所も荒れていた土地で人びとが再び耕作できるように取り組みました。人びとは荒れた土地を切り開き、そのわずかな土地に芋を植えていました。

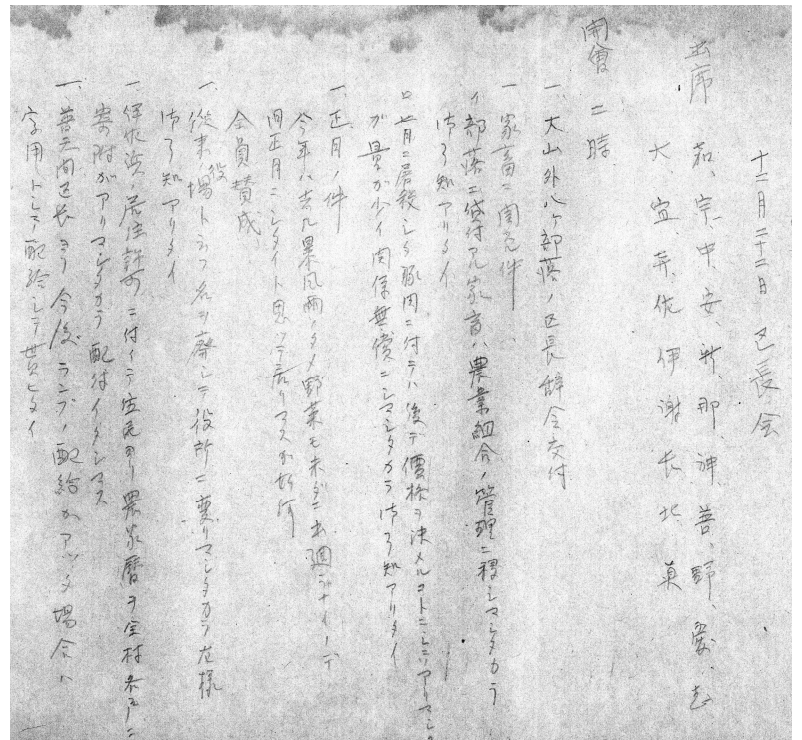
○思いがけない旧正月

しかし、何度も上陸した台風によって植えてあった芋は被害を受け、食糧事情はさらに悪化し、人びとの風習も影響を受けました。文化課所蔵の行政文書「区長会(自治会長会)記録」をみると、1947(昭和22)年12月22日の区長会において、ある出席者から「今年ハ去ル暴風雨ノタメ野菜モ未ダニ出廻ラナイノデ旧正月ニシタイト思ツテ居リマスガ如何」と提案されています(資料1)。この提案には出席者全員が賛成し、食糧不足のため翌年(1948年)の正月は旧正月の時期まで延期することになりました。戦前の沖縄県では、「新生活運動」によって、旧正月の廃止が徹底され、戦後においても、沖縄民政府*は新正月の元旦を公休日として制定していました。このように、新正月が人びとに定着しつつある時期にあって、おおやかな旧正月の実施は異例とも言えるでしょう。

当時の宜野湾村長の桃原亀郎は、この年の旧正月を自宅で迎え、「村へ帰り、部落へ帰り、始めて家へ帰っての御正月」と日記に記しています(『戦後初期の宜野湾-桃原亀郎日記』宜野湾市教育委員会1997年)。多忙をきわめた村長にとって、旧正月が思いがけない休息となったのです。また、宜野湾村では1951(昭和26)年にも旧正月が実施されたようですが、その理由は今のところ不明です。

* 一口メモ：沖縄民政府とは…。

1946(昭和21)年4月発足。
現在の沖縄県に相当します。



資料1：区長会では正月の件の他にも家畜についても話し合われた。

市史のお仕事ってなあに？

みなさんは市史編集係のお仕事について、ご存知ですか？このコーナーでは市史編集係の仕事内容についてお伝えしたいと思います。市史編集係では、『宜野湾市史』の編集作業や、みなさんが今お読みの『がちまやあ』づくりなど、さまざまな業務を行っています。ここではそのなかの一つ、宜野湾関係資料の整理について、みていきたいと思っています。

◆宜野湾関係資料の整理とは？

宜野湾関係資料の整理には、宜野湾市関係の新聞の目録づくり・宜野湾市関係資料の図書登録・行政文書の整理などがあります。それでは、宜野湾市関係資料の整理のなかから、宜野湾市に關係する新聞の目録づくりについて、みなさんに紹介したいと思います。

★宜野湾市関係の新聞の目録づくりとは？



みなさんがお読みの『琉球新報』、『沖縄タイムス』の両新聞から宜野湾に関する記事を拾い出し、目録をつくるお仕事です。



◀ 新聞から記事を拾い出す作業の様子

☆チェックする記事は？

① 宜野湾市民が投書したもの

宜野湾市民が投書した記事以外にも、他市町村の方々が宜野湾市に関する内容を投稿している場合もあるので、それらの記事も含まれます。

② 事件など宜野湾市内で起きたもの

宜野湾市内で起きた事件と、市外で起きた事件に宜野湾市民が関わった内容の記事も含まれます。

③ 宜野湾市が関わっている県政

県政は、県全体に関わるもので、宜野湾市が関係した県政についての記事も含まれます。

④ 普天間基地に関するもの

基地は、SACO 関連や、米軍再編、普天間飛行場移設に連動する名護市などの動きについてもチェックしています。

⑤ その他

宜野湾市民が掲載されたイベントなどでの感想、宜野湾市出身者などの記事など。

* 宜野湾市関連の記事は 1 日あたり、およそ 40 件ほど拾い出すことができます。

☆パソコンで目録をつくる

チェックした記事を日付順かつ新聞社ごとに、それぞれ朝刊、夕刊というように入力していきます。パソコンでの目録づくりは、2003（平成 15）年から開始しています。パソコンでの目録は下記のようになります。

宜野湾市関連記事

年月日	曜	頁	内容	新聞社	面	備考	キーワード
H17.8.6	土	朝 25	沖国大と九大生 基地問題で討論	タイムス	情報・案内	沖国大生・九州大生が「戦争と平和を考える」と題したフォーラムを開催	沖国大>フォーラム
H17.8.8	月	夕 7	バレー・中部商 決勝T敗退	新報	スポーツ	千葉きらめき高校総体(バレーボール)聖カタリナ女(愛媛)2-0 中商:写真付き	千葉きらめき 高校総体
H17.8.13	土	朝 28	大山綱引き 行列初参加	新報	社会	宜野湾市の伝統行事で知られる大山綱引きが、宜野湾はごろも祭り「察度王歴史絵巻行列」に初めて参加する:写真付き	はごろも祭り
H17.8.22	月	夕 6	普天間中が金 美里中は銀	タイムス	総合	21日、第五十回九州吹奏楽コンクールの中学校の部があり、九州・沖縄の代表25校が演奏し9校が金賞を受賞:写真付き	九州吹奏楽コンクール >宜野湾市

☆目録をつくったあとの新聞は？

目録を入力し終わった新聞は、新聞社、月ごとに整理していきます。文化課には現在、整理を終えた 1999（平成 11）年の新聞から、2005（平成 17）年 8 月分までの原紙を保管しています。

すみずみまで新聞に目を通し、チェックをする作業は地道で時間もかかりますが、新聞をパソコンでデータ化することにより、いつ・どこで・どんなことが起こり、またそれに関連した記事の大まかな内容を知ることができ、必要なときには、記事を短い時間で簡単に探すことができます。

このような作業の積み重ねによって、宜野湾市の歴史を振り返る際に、新聞から拾い出した宜野湾関連記事も貴重な歴史的資料となり、未来の宜野湾市の歴史へとつながっていくのです。

じのーん・ヌーヴォー？！

※「じのーん」とは宜野湾のこと

先日、ボージョレー・ヌーヴォー（今年、収穫したぶどうで作られたフランス産のワインの新酒）が売り出され、世の中を賑わしました。これからクリスマス、そして年末年始と、一年のうちでも、お酒がよく飲まれる季節に差しかかります。そこで、宜野湾でのお酒の製造について少しふれてみたいと思います。

かつて宜野湾でもワインが作られていたことを知っている方は、もう少ないかもしれませんね。ワインといっても、ぶどうで作ったワインではなく、泡盛ベースのカクテルだったようですが、「ラッキーワイン」という名前で売り出されていました。しかし、現在ラッキーワインに関する手がかりは、1950年代に撮影されたラッキーワインにまつわる写真、製造地が大山であったということ、ラッキーワイン以外に「ラッキースローヂン」、「ラッキードライ」という銘柄のお酒も製造していたということ、そしてテレビでもコマーシャルが放映されていたらしいということ以外に残されていません。（写真1）。



写真1. 当時の広告看板



写真2. 「乙姫」のラベル

1951（昭和26）年2月1日の『うるま新報』には、中部酒造組合が旧正月向けに、お酒の広告を載せており、その中には「宜野湾村大山区・三洋酒造工場」の名前を見つけることができます。また、1962（昭和37）年の酒造組合の資料には、宜野湾村大山の中央醸造化学研究所でラッキーワイン、「スローヂン」、「乙姫」（写真2）の三種類のお酒が製造されていたことが記されています。これらのことから推理してみると、ラッキーワインと三洋酒造工場、そして中央醸造化学研究所が、それぞれ関係していたであろうことが考えられます。

このように、点の情報を線で結んでみるのも、私たち市史編集係のお仕事です。さらに、当時を知る方々からお話を聞かせて頂いて確かめたり、専門の先生方から教えて頂きながら本格的に調査を進めることで、宜野湾市の歴史の一部を記録して残していくのです。市史編集係では、宜野湾での酒造について本格的な調査を行ったことはなく、これに関しては、まだまだ情報不足ですが、みなさん、また、みなさんの周囲には、もっと詳しい情報をご存じの方がいらっしゃるかもしれませんね。この記事、また、他の記事に関しましても、お心当たりの点がございましたら、情報提供にもぜひ、ご協力お願いいたします。みなさんの、ちょっとした記憶も大切な財産です！